

「まで」と「までに」の 肯否体系について

森 篤嗣

✦要旨

本稿では、否定文における「まで」を軸として、主節における「まで」と「までに」の肯否体系を示す。従来、「まで」と「までに」を対比した先行研究のほとんどが肯定文における「まで」と「までに」の分析であった。一方、否定文における「まで」についても、「までに」への換言の可否に言及した研究はあるが、肯否体系を示すまでには至っていない。

結論として、否定文における「まで」の事態解釈は、「次は」を加えれば「事態の生起」解釈に傾き、「から」を加えれば「事態の継続」解釈に傾きを与えることができることを述べた。そして、この事態解釈の異なりによって、否定文における「まで」が肯定文における「まで」ないし、肯定文における「までに」と対をなすという肯否体系を形作るのである。

✦キーワード

「まで」、「までに」、否定文、事態の生起、
事態の継続

✦ABSTRACT

This paper examines the positive/negative correspondence system of *made* and *madeni* in the Japanese language. If the negative polarity is converted to the positive, and the (converted) positive sentence is acceptable, then the terminative NP is ambiguous as to whether or not the NP is in or out of the scope of negation. On the other hand, if the positively converted clause is not acceptable, the *made*-marked NP is construed as out of the scope of negation.

In conclusion, when the *kara*-marked NP (an ablative NP) is added to the sentence, it is construed as a situation of accruing, whereas when the adverbial phrase *tsugiwa* (next) is added to the sentence, it is construed as a situation of duration. This difference organizes the correspondence system of *made* and *madeni* in the Japanese language.

✦KEY WORDS

made, *madeni*, negative sentence, a situation of accruing, a situation of duration

On the Japanese Positive/Negative Correspondence System of *Made* and *Madeni*

ATSUSHI MORI

1 問題のありか

主節における^[註1]「まで」^[註2]と「までに」の肯定文（以後、「マデ肯定」と「マデニ肯定」と記す）の意味の違いについては、特に日本語教育における需要もあり、様々なことがわかっている。「まで」と「までに」の意味の違いについて最初に詳しく取りあげたのは永野（1964）である。永野（1964）では「瞬間動詞」の例として次の例が挙げられている。

- (1) 十五日までに結婚する ……○ (永野 1964: 270)
(2) 十五日まで結婚する ……× (永野 1964: 270)

このように永野（1964）は、金田一（1950）の動詞分類における瞬間動詞ではマデニ肯定は成立するが、マデ肯定は成立しないことを指摘した。こうした分析は現在においても、より詳細な形で引き継がれている。例えば、庵ほか（2000）では、以下のような例を挙げて、マデ肯定については「状態が継続する最終時点を表します」、マデニ肯定については「動作が行われたり出来事が起こったりする期限を表します」と説明している。

- (3) 1時までに {a.○私はここにいた／b.○氷は溶けた／c.○私はここに来た／d.○私は宿題をした}。 (庵ほか 2000: 204)
(4) 1時まで {a.○私はここにいた／b.×氷は溶けた／c.×私はここに来た／d.○私は宿題をした} (庵ほか 2000: 204)

この庵ほか（2000）では、(4) について、

- (5) 「溶ける」のような変化動詞や「来る」のような往来に関する動詞は一時的な出来事を表すため、「～まで」といっしょには使えません。
(庵ほか 2000: 205)

と、共起しない理由を述べている。このように、マデ肯定とマデニ肯定の使い分けに関しては、動詞の種類の違いに基づいて説明が可能である。

一方、否定文における「まで」（以後、「マデ否定」と記す）においては、(4) のような共起制限が生じない。

- (6) 1時まで {a.○私はここにいなかった／b.○氷は溶けなかった／c.○私はここに来なかった／d.○私は宿題をしなかった}。

なぜ、マデ肯定に生じる共起制限が、マデ否定には生じないのだろうか。「溶ける」のような変化動詞（金田一分類における瞬間動詞）の場合に肯定文では「まで」が共起せず、否定文に「まで」が共起することを寺村（1983）は以下のように指摘している。

- (7) 一方、いわゆる瞬間動詞は、常に生起性においてしか使われず、したがってPマデQのQになれない。ただし、瞬間動詞でも、否定の形になると、Pマデによって限定され得る。（中略）これは、一般に、事態の生起は瞬間的現象だが、「あることが起こらない」というのは状態である、という、考えてみれば当たり前のことから来ている。（寺村 1983: 239）

寺村（1983）は「まで」は「事態の継続」、「までに」は「事態の生起」を表すとしており、これは永野（1964）が「まで」は「期間」、「までに」は「期限」を表すとしているのとほぼ並行的である。そして、マデ否定では、「あることが起こらない」という状態を「事態の継続」ないしは「期間」として否定することになるというのが（7）であろう。

つまり、「溶ける」において、マデ肯定に生じる共起制限がマデ否定には生じない要因は、動詞分類としては変化動詞（瞬間動詞）であるが、否定文になることにより「事態の継続」と解釈されるからということになる。こう考えると、マデ否定を分析するには、動詞の種類の違いに基づくだけでは不十分であり、文全体の事態解釈を考慮することが不可欠と言えよう。

本稿では、マデ否定について、動詞に固有の問題と考えるのではなく、事態

解釈こそが重要であるという立場に基づき分析を行う。また、マデ否定を軸として、「まで」と「までに」がどのような肯否体系を成しているかを示し、「まで」と「までに」の提示に関する日本語教育における問題を解決することを目的とする。

2 日本語教科書における「まで」と「までに」

本節においては、「まで」と「までに」に関する日本語教育の取り扱いの現状について、「マデ肯定とマデニ肯定の使い分け」と「節を受けるマデの扱い」の二点から示す。

2.1 動詞の種類の違いの説明を避ける傾向

前節において、「マデ肯定とマデニ肯定の使い分けに関しては、動詞の種類の違いに基づいて説明が可能である」と述べたが、実は日本語教科書を見ると、動詞の違いについて明示的な説明を避ける傾向がある。

初級の教科書の中で、明示的に「まで」と「までに」の違いについて言及しているのは『SFJ』である（筑波ランゲージグループ1992）。

- (8) までに、indicates that the action is completed no later than the time given.
(筑波ランゲージグループ1992:167)
- (9) まで、on the other hand, indicates that the action continues until the time given.
(筑波ランゲージグループ1992:167)

(8)と(9)を見てみると、completedやcontinuesといった抽象的な概念は提示されているが、具体的に動詞の種類の違いには言及していない。

次に益岡・田窪(1987)も見てみよう。

- (10) マデは続いている動作・状態が終わる時間を表す。(益岡・田窪1987:72)
- (11) マデニは動作の期限・締め切り時間を表す。(益岡・田窪1987:72)

やはり(10)と(11)を見ても「動作・状態が終わる時間」「動作の期限・締め切り時間」といった抽象的な概念は説明しているものの、具体的に動詞の種類の違いについては言及していない。

これは、どういうことなのであろうか。一つ考えられるのは、「動詞の種類の違い」を持ち出すと、「じゃあ、この動詞はどちらですか」という質問が出て、それに十分に対応するのが難しいということがある。全ての動詞がマデ肯定かマデニ肯定のどちらかに振り分けられればよいのであるが、実際には「5時{まで/までに}寝る」のようにどちらも使える動詞が少なくない。そうすると両方使える動詞の場合、何が違うのか説明が必要になるため、抽象的な概念の説明にとどめる方が無難ではある。

しかし、動詞の種類の違いという形式的に明示的な違いが示せるのであれば、その方が教育的には有意義ではないだろうか。そうすると、クリアすべきは、マデ肯定とマデニ肯定のどちらにも使える動詞についての説明であるということになる。それに貢献できるのが、本稿の主張する「まで」と「までに」の肯否体系である。

2.2 節を受ける「まで」の扱い

もう一つの問題は、節を受ける「まで」を、格助詞ないし順序助詞の「まで」と別に扱っている教科書とそうでない教科書があることである。庵ほか(2000)の巻末の「主要初級教科書との対応表」に取りあげられている5種の教科書(『みんなの日本語』、『進学する人のための日本語初級』、『日本語初歩』、『新文化初級日本語』、『初級日本語』)に『SFJ』も含めた6種の教科書のうち、節を受ける「まで」を取りあげているのは、『新文化初級日本語I』だけである。

- (12) 治るまでおふろに入らないでください。(文化外国語専門学校2000:143)
- (13) 名前を呼ぶまで、ここでお待ちください。(文化外国語専門学校2000:143)

(12)はマデ否定で「治ったらおふろに入ってもいい」、(13)はマデ肯定で「名前を呼んだら来てください」ということを含意している。節を受ける「まで」では、「治る」「名前を呼ぶ」という時点まで「おふろに入らない」「待つ」わ

けであるが、厳密に言うとき「治る」「名前を呼ぶ」という時点は、「おふろに入らない」「待つ」という行為に「含まれない」解釈になる。

この言語事実については本稿でこれから述べていくが、節を受ける「まで」だけに限るわけではなく、実は名詞を受けるマデ否定と密接に関連している。初級では「まで」と「までに」の厳密な違いは、それほど重要な学習項目ではないが、中級にさしかかって「まで」と「までに」の違いをうまく説明するには、節を受ける「まで」をうまく導入することで、「まで」と「までに」の肯否体系を示すことが効果的と考える。

3 マデ否定における解釈を巡って

本節では、「まで」と「までに」の肯否体系の鍵となるマデ否定における解釈について考えていく。マデ否定の解釈を巡っては、木村（1983,1984）と東郷（1985）において次のような例について論議された。

(14) T駅まで止まりません。

これは電車の車内アナウンスでよく聞かれる表現で、例えば新幹線で「名古屋を出ますと、次は東京まで止まりません」というとき、この新幹線は名古屋駅と東京駅には「止まる」ことになる。つまり「東京」は「止まりません」という否定の範囲に「含まない」解釈が優勢になることがあるということになる。

これについて木村（1983）では、「「まで」の下の「は」が省略されたとも考えられる」という見解を示し、「T駅は除外されるという生活習慣的な解釈」と結論づけた。再論となった木村（1984）では、高校生87人にアンケート調査を実施してネイティブの直観を確かめ、最終的に「「まで」の用法にある意味のあいまいさ」として、「（～の前）まで」「（～になる）まで」などの意を補って考えれば文の解釈が明確化すると述べた。

これに対して東郷（1985）では、これら木村の「意の補い」について「本質的な問題ではない」と述べ、あくまで一文の中で「まで」の示す範囲を考察すべきだと主張した。その結果、以下の二点を結論とした^[註3]。

(15) 否定表現の中にある動詞が、状態動詞・継続動作動詞である場合、それと対応している「まで」に上接する体言は、その範囲に含まれる。

（東郷 1985: 28）

(16) 同じくそれが、瞬間動作動詞である場合、それと対応している「まで」に上接する体言は、その範囲に含まれない。

（東郷 1985: 28）

木村（1983,1984）は、あくまで解釈次第という範疇を出ない。東郷（1985）は動詞分類に基づいてある一定の傾向を示したと言えるが、東郷自身も述べるように例外が多い。

こうした分析からさらに一步進んで、マデ否定のスコープについて論じたのが堀川（1991）である。堀川（1991）では、次の二つの例を挙げ、否定のスコープの違いによる解釈の差異について説明している。

(17) 太郎は [9時まで彼女を待た] なかった。

（堀川 1991: 290）

(18) 太郎は30歳まで [結婚し] なかった。

（堀川 1991: 290）

(17) では「9時まで彼女を待た」ことが否定されている。すなわち、9時になる前の8時半や8時45分に帰ってしまったことを表す。それに対して (18) では、「30歳まで」が否定のスコープに入らず、「結婚する」という状態だけが否定されている。堀川（1991）では、(17) のように「まで」が否定のスコープに入る用法をA用法、(18) のように入らない用法をB用法としている。(17) のような堀川のA用法では、「待つ」という行為は「9時になる前（例えば、8時半や8時45分）」までしか継続しないため、「9時」という時間の着点を否定の範囲に「含む」解釈となる。そしてこのA用法の場合は、堀川（1991）が指摘するように「までに」が非文となるという特徴がある。

(19) *太郎は9時までに彼女を待たなかった。

（堀川 1991: 293）

これに対して、(18) のような堀川のB用法では、「結婚する」という状態だけが否定されているに過ぎず、このとき「結婚する」のは「30歳」であるかど

うかは解釈次第であり、「30歳に結婚した」という「30歳」を否定の範囲に「含まない」解釈も、「31歳に結婚した」という「30歳」を否定の範囲に「含む」解釈も可能である。そしてこのB用法の場合は、A用法とは異なり「までに」が適格となるという特徴がある。

(20) 太郎は30歳までに結婚しなかった。

堀川(1991)はさらに瞬間動詞を継続動詞的に使うこと(「座る」など)も、継続動詞を瞬間動詞的に使うこと(「勉強する」など)もあり得るとしており、動詞分類によってA用法・B用法に分けられると主張するのではなく、多くの動詞ではAB両用法が可能であるとしている。そして、A用法・B用法・AB両用法という動詞を3つのグループに分けた上で、堀川(1991)では、

(21) 動詞は3つのグループに分かれることがわかったが、このグループ分けと、「～マデニ」の可否とはきれいな対応を示している。(堀川1991:292)

と、述べており、「～マデニ」の可否とマデ否定の解釈が深く関係していることを指摘している。

まとめると、マデ否定について、A用法の場合には「含む」解釈となり、B用法の場合には「含む」解釈と「含まない」解釈が混在することになる。さらにAB両用法が可能な場合には、当然ながらB用法としての解釈が可能となり、やはり「含む」解釈と「含まない」解釈が混在することになる。つまり、純粋なA用法となる動詞を除き、ほとんどの動詞において「含む」解釈と「含まない」解釈が混在することになる。

こう考えると、マデ肯定が成立しない「結婚する」やマデニ肯定が成立しない「待つ」のように、動詞の種類によって寺村(1983)で言う「事態の生起」か「事態の継続」という事態解釈が自動的に決定される場合もあるが、むしろ多くの場合において事態解釈は動詞そのものではなく事態全体により決定されると言える。

例えば「休む」という動詞では、一つの動詞でマデ肯定・マデ否定・マデニ

肯定の全てが成立する。

- (22) 十五日まで休みます。
- (23) 十五日まで休みません。
- (24) 十五日までに休みます。

しかし、「休む」という動詞においても、マデ肯定とマデニ肯定は無制限に成立するわけではなく、事態全体の解釈の仕方によっては成立しない場合がある。事態全体の解釈としては、マデ肯定が成立しない「事態の生起へ傾いた解釈」と、マデニ肯定が成立しない「事態の継続へ傾いた解釈」の二つがあると考えられる。次節では、どのような条件の下で事態解釈に傾きが生じるのかについて考察する。

4 事態解釈の傾きとマデ・マデニ肯否体系

永野(1964)では、「まで」と共起する場合は「書く(=書き続ケル)」「行く(=通ウ)」「出る(=出演スル)」の意味で継続動詞になり、「までに」と共起する場合は「書く(=書キアゲル)」「行く(=到着スル)」「出る(=アパートカラ引ッ越ス)」の意味で瞬間動詞になるというように、同じ動詞が継続動詞にも瞬間動詞にもなるとしている。しかしながら、本稿においては、これは動詞固有の問題ではなく、どのような事態において当該の動詞が使われ、どのように解釈されているかという問題、つまり事態解釈の問題であることを主張する。

- (25) 目的地につくまでは、休まないこと、立止ってもいけない、したがって歩調は、かなりゆっくりと、汗の出ないいでに歩きつづけること
(新田次郎「孤高の人」)

例えば、(25)の事態においては、「目的地につくまで」という「期限」の上で、「休む」や「立ち止まる」という「事態の生起」をさせないという解釈となる。このとき、「事態の生起へ傾いた解釈」になっているため、「目的地につくまで

に休む」というマデニ肯定は成立するが、(25)の文脈に限れば「*目的地的につくまで休む」は成立しない。(25)と同様の解釈を生じさせるには、「次は」のような「事態の生起」解釈を優先させるような表現を加えればよい。

(26) 次は十五日まで休みません。(→*次は十五日まで休みます^[註4])

「次は」を加えることによって、「事態の生起へ傾いた解釈」とすることで、「まで」は肯定文と共起できなくなるのである。

逆に、「事態の継続」解釈を優先させることも可能である。奥津(1966)が順序助詞と名付けて指摘するように、「まで」全体が(特に「から」と共起して)名詞的に機能し、数量的表現に近くなることもある。

(27) 十日から十五日まで休みません。(→十日から十五日まで休みます)

「十日から」を加えることで、習慣的な継続状態である「期間」としての用法に限定され、「事態の継続」解釈が優先される。

このように「～から」を加えることによって「事態の継続」解釈を優先させることが可能となる。一方、「次は」を加えることによって「事態の生起」解釈を優先させることが可能となる。

ここで本稿の主題である「まで」と「までに」の肯否体系に関して述べる。(7)でも述べたように、「事態の生起」解釈が優先されるマデ否定は、「まで」という形式でありながら「までに」と類似した文法的条件が要求される。つまり、表1に示すように「マデ肯定とマデ否定は必ずしも対をなさない」、「マデ否定とマデニ肯定が対をなす場合もある」ということになる。

従来の研究では、マデ肯定とマデニ肯定の比較が多かったが、本稿ではマデ肯定とマデニ肯定を結ぶ軸としてマデ否定に注目した。なおかつマデ否定における「事態の生起へ傾いた解釈/事態の継続へ傾いた解釈」の振り分けによって、マデ否定がマデ肯定とマデニ肯定のどちらと対をなすのかが明らかになったと言える。

表1では、主節においては「マデ肯定とマデ否定は必ずしも対をなさない」、

表1 主節における「まで」と「までに」の肯否体系

	マデ肯定	マデ否定	マデニ肯定
事態の生起の解釈のみ	*Pマデ結婚します	Pマデ結婚しません	↔ Pマデニ結婚します
事態の生起へ傾いた解釈	*(次は)Pマデ休みます	(次は)Pマデ休みません	↔ (次は)Pマデニ休みます
事態の継続へ傾いた解釈	(～から)Pマデ休みます	↔ (～から)Pマデ休みません	* (～から)Pマデニ休みます
事態の継続の解釈のみ	Pマデ待ちます	↔ Pマデ待ちません	*Pマデニ待ちます

「マデ否定とマデニ肯定が対をなす場合もある」という言語事実を指摘したわけであるが、文法体系を重視する立場からすると、こうした考え方は受け入れがたいかもしれない。しかし、日本語教育において非母語話者に「表1のように考えた方が母語話者の直観に近い」と示すことは有効ではないだろうか。これにより、2.1に示した「マデ肯定とマデニ肯定のどちらにも使える動詞についての説明」について、事態解釈の傾きという概念により解決が可能であると言える。

5 事態解釈と「含まない」解釈

本節では、マデ否定における解釈を巡って問題となった「含む」解釈か「含まない」解釈かという点について、本稿の主張する事態解釈の傾きの観点から考察する。

語用論的な問題も含まれるが、「止まる」や「結婚する」などの動詞の場合、経験的に「含まない」解釈が比較的なされやすいという傾向はあり、これが問題の根源であると思われる。例えば、「結婚する」は東郷(1985)、堀川(1991)でも取りあげられている動詞で、東郷では(16)に見たように「含まない」解釈になるとされており、堀川ではB用法として「含む」か「含まない」かには触れていない。しかし、実例を見てみると、「含まない」解釈が優先されるこ

とが多い（下線部は筆者による）。

- (28) ムハマドは、たぶんその性向からでしょうか、メッカを出発して近隣諸国で交易をするさまざまなキャラバンといつも一緒に旅をしていたからでしょうか、26歳まで結婚しませんでした。（中略）彼が26歳のときに、彼と結婚した人とは一体誰でしょう。

(http://www.geocities.jp/oneworld_international/library/general/life10_j.htm)

このように、「結婚する」において「事態の生起へ傾いた解釈」がなされる場合、「含む」解釈も可能ではあるが、「含まない」解釈が生じやすいことがわかる^[註5]。このことから、日本語母語話者（日本語教師）の言語直観に基づく次のような仮説が立てられる。

- (29) 否定文における「まで」の指定範囲は、「事態の生起の解釈」がなされる場合（マデ肯定が非文になる場合）であれば、「含まない」解釈が生じる可能性がある。

しかし、ここで注意したいのは、(29)の仮説はあくまで事態解釈に基づくものであり、動詞に固有の問題ではないということである。例えば、「止まる」の場合、先行研究の指摘通り、基本的には「事態の生起へ傾いた解釈」となるため、「含まない」解釈が生じやすい。

- (30) T駅まで止まりません。（→*T駅まで止まります）

ただし、「止まる」においてもマデ肯定が非文とならない場合もある。

- (31) T駅まで水道が止まりません。（→T駅まで水道が止まります）

まず、考えられる第一のパターンは(31)のような場合である。新幹線の洗面所の蛇口が壊れて水が開放しになり、T駅まで修理できないため、仕方なく

(31)のような張り紙をした場合ならば、「T駅まで水道が止まります」というマデ肯定は非文ではない。このとき、(31)は「事態の継続へ傾いた解釈」となり、「含む」解釈が選択されやすくなる^[註6]。

- (32) この列車はT駅まで止まりますが、T駅を出た後は終点まで止まりません。

次に考えられる第二のパターンは(32)のような場合である。これは、形式上は明示していないが「当駅から」のような始点を想定して「まで」を解釈しようとする文脈になっており、表1の「事態の継続へ傾いた解釈」に相当する。これらの例から考えても、「含む／含まない」解釈を左右するのは、動詞に固有の問題ではなく、事態をどのように解釈するかということが重要であることがわかる。そしてどのような事態解釈がなされているかを判断する一つの材料が表1で示したように、マデ否定がマデ肯定とマデニ肯定のどちらと対をなすのかということなのである。

6 「含まない」解釈がなされる要因

それでは、「含まない」解釈の要因と考えられる「事態解釈の傾き」の内実はどうなっているのだろうか。ここで重要なのは、「から」と「まで」が受ける名詞が「期間」を表すため「期限」として捉えることが難しいという点である。名詞を「期限」として捉えることが難しいとき、日本語母語話者は「～になる」などを加えて事態の生起を読み込もうとする。

- (33) 30歳まで結婚しませんが。
(34) 30歳になるまで結婚しませんが。
(35) *課長まで結婚しませんが。
(36) 課長になるまで結婚しませんが。

これまで述べてきたように、「含まない」解釈は習慣的な継続状態ではなく、

状態の変化を前提としている。そのため、「まで」を「期限」と解釈することが不可欠であり、(33)は「30歳」を「期限」として、「含まない」解釈をすることが可能である。「30歳」を事態の生起の「期限」と捉えて解釈すると(34)となるが、これは(33)と大して変わりはない。しかし、(35)は「課長」が明確な時点ではないため「期限」と捉えることはできない。これを解釈するには(36)のように、事態の生起を読み込む必要が出てくるのである。

事態の生起と語用論的含意についても寺村(1983)が重要な指摘をしている。まず、寺村(1983)は「までに」について、「Pという時点以前、おそくともPという時点で、Qという事態が生起する」と述べており、これが否定文の場合には「まで」でほぼ同様の文法的条件となる。続いて寺村(1983)は「までに」の語用論的含意について次のように続けている。

- (37) PマデニQという文型が実際に使われている文脈を見ていくと、この文型を使う話し手の本当の関心は、P点以前にQが起るといことよりむしろ、P点以降の事態にあるということが分かってくる。ただ、その事態というのは、あることが起こらなければ実現しないこと、ある事の発生、消滅の結果生じる事態である。(寺村1983:242)

一方で「まで」についても寺村(1983)は次のように述べる。

- (38) PマデQは、既に記したように、あるP点以前の時点からP点に到る時間の幅をQという事態が継続するというを、いわば表の意味として持つが、それは同時に、そのQという事態がP点で終わり、それ以降は次の(あるいは別の)事態に移行するというを暗示している。(中略)この文型が、Qの否定の形で使われる事が実際に多いという事実は、右のようなこの文型の成立する表現的条件の性質を裏付けるものであろう。(寺村1983:242)

例えば、「結婚する」の場合は(37)の「ある事(婚姻)の発生の結果生じる事態」であり、同時に語用論的含意としては、(38)の「次の事態に移行」とい

うことになる。4節で「次は」を加えることによって、「含まない」解釈を優先させるという手順を示したが、これも要は「次は～になる」という「次の事態に移行」を促すためである^[註7]。

それでは、なぜ「～になる」を加えて事態の生起を読み込むと、「含まない」解釈が生じるのであろうか。

- (39) お母さんが帰ってくるまで勉強する。

(39)では、「お母さんが帰ってくる」という出来事が起こる以前まで「勉強する」という動作が続くということを「表の意味」として持ち、さらには「お母さんが帰ってきたら勉強をやめる」という「次の事態への移行」を暗示している。つまり、「まで」が節を受ける場合は、肯定文・否定文を問わず「含まない」解釈が生じやすいと言えよう^[註8]。

寺村(1983)は「PマデQナイ、という表現は実際にもかなり多く、用例を拾うことは簡単である」として、「忘れるまで結婚しない」と「遣いはたすまで帰らない」の二例を挙げているが、その両方が「V-るまで」であるのは偶然ではない。「次の事態に移行」を暗示することによって成立する「含まない」解釈は、「節を受けることによって」か「節を想定することによって」事態の生起を読み込ませるのである。

最後に、節を受ける「まで」では、肯定文でも「含まない」解釈となるにもかかわらず、なぜ名詞を受ける「まで」では否定文でしか「含まない」解釈が問題とならないのかという疑問について検討しておく。これについても寺村(1983)の考察が参考になる。

- (40) 「三時マデ待ツ」というのは、同時に「三時(になっても来なかったら、それ以降は待たない)」ということを裏に含んでいる。(中略)ただ、PマデニQにおいて、その裏の意味に話し手の言いたいことの比重が大きいかかっているほど、PマデQの右に見た裏の意味の比重が大きいはいえないようである。(寺村1983:242)

(40) から二つのことがわかる。一つ目は名詞を受け、肯定文である「1時まで勉強します」であっても、「1時(になったら、それ)以降は勉強しない」ということを裏に含んでおり、「含まない」解釈も可能であるということである。しかし、「マデニほど比重が大きいとはいえない」ということと、前述したように「時」という時間的な幅の狭さに起因して普通は「含む」解釈がなされる。

二つ目は「まで」と共起する否定文では、「まで」という形式でありながら、事態の生起を読み込む「までに」と同じ文法的条件が要求されることである。したがって、形式としては「まで」であっても、裏の意味の比重の大きさとしては「までに」に準ずることになるため、「含まない」解釈が優先されやすくなるのである。こうした解釈のプロセスから見ても、表1に示した「まで」と「までに」の肯否が「含む／含まない」解釈と密接に関係していることが裏付けられる。

このように、マデ否定の「含まない」解釈と、節を受ける「まで」との関係を描き出すことができる。これは、2.2に示した日本語教科書における節を受ける「まで」の扱いが、従来考えられてきた以上に「まで」と「までに」のシステムにおいて重要であることを示唆している。初級が終わった時点で、改めて「まで」と「までに」の違いについて学習する場合には、節を受ける「まで」をうまく導入し、「まで」と「までに」の肯否体系を示すことが効果的であろう。

7 まごめ

本稿では、「まで」と「までに」を対比した分析を行い、否定文における「まで」を軸として、「まで」と「までに」がどのような肯否体系を成しているかについて明らかにした。その結果、マデ否定には必ずしもマデ肯定が対をなすわけではなく、事態解釈によってはマデニ肯定が対をなす場合があることを指摘した。

さらに、マデ否定の事態解釈は動詞に因る部分もあるが、事態解釈に「傾き」を与えることが可能であることから、動詞に固有の問題ではないことを指摘した。具体的には、マデ否定に、「次は」を加えれば「事態の生起」解釈に傾き、「から」を加えれば「事態の継続」解釈に傾きを与えることができる。マデ否

定の事態解釈においては、「まで」と「までに」の肯否体系を念頭に置いて検討することで、事態解釈の動機づけに対して背景的な意味づけが可能となるのである。

また、従来問題とされてきたマデ否定の「含まない」解釈について、事態の生起という解釈を動機づける要因として「節を受ける」という文法現象が関わっていることを指摘した。本稿で指摘した「次は」テストにしても、「次の事態に移行」という事態解釈を誘発するための道具立てであり、本質的には「次は」も「節を受ける」も語用論的な解釈も含めた日本語母語話者の事態解釈に傾きを与えるという点で共通するのである。

日本語母語話者の言語直観(事態解釈の傾き)を明示的な形で描き出すことは、日本語教育において言語直観を持たない日本語非母語話者にとっても有用であり、「まで」と「までに」の有効な提示方法について示唆を与えることができると考える。

〈国立国語研究所〉

〈付記〉

本稿で取り扱った問題の発想は、実践女子大学の山内博之氏との雑談から生じた^[註9]。また、本稿を成すに当たっては、山内氏だけでなく、大阪大学の堀川智也氏、実践女子大学の福嶋健伸氏、鳴門教育大学の茂木俊伸氏、神戸学院大学の辻野あらと氏にご助言を頂いた。丁寧な査読コメントを頂いた匿名査読者の方々も含め、各位に深く感謝を申し上げたい。ただし、本稿の不備は全て筆者の責任である。

注

[注1] …… 本稿では議論を主節における「まで」と「までに」の用法に限定する。その理由はマデニ否定の振る舞いが、主節と従属節で大きく異なるからである。主節におけるマデニ否定は「*3時までに来ません」のように成立しにくい。従属節におけるマデニ否定は「3時までに来ないとお仕置きよ」のように容易に成立する。したがって、従属節においては「まで」と「までに」の肯否体系は整然としており、その理由については本稿では言及しないが、ある意味、問題が生じにくいと言える。

[注2] …… 「まで」には、とりたて助詞としての用法も存在するため、「学校まで行けません」のような文は多義化することとなる。一つは格助詞の解釈で、「到達

できない」という意味である。もう一つはとりたて助詞の解釈で、「(他にも行けないうところがあるけれども、それにさらに加えて) 学校にすら行けない」という意味である。本稿では、とりたて助詞の解釈については論じない。

[注3] ………ただ、東郷 (1985) では注で「可能動詞 (状態動詞に含まれる) の例でも、「夏休みまで (は) 帰れない」のように、「夏休み」が「帰れない」範囲に含まれないものもあるから、この原則ですべてが説明しきれると考えているわけではない。あくまでも原則、もしくは傾向という域に止まるといわねばなるまい」(東郷 1985: 28) と述べている。

[注4] ………当然、「次の機会には十五日まで休みます」のような解釈であれば成立するが、ここではその解釈は含めない。ちなみに「次は十日から十五日まで休みません」のように、「次は」と「から」の両方を共起させた場合も、「次の機会には～」解釈になると考えられる。

[注5] ………「結婚する」でも、「月末まで結婚しません」などのように、むしろ「含まない」解釈の方が優先される例も見られる。これには「月末は期間の最後を示すのだろう」などのような社会通念に基づく語用論的な要因が多分に作用していると考えられる。例えば、「休む」でも「正月まで休みません (主に「含まない」解釈)」と「大晦日まで休みません (主に「含む」解釈)」では解釈が分かれることがある。木村 (1984: 46) では、次のような談話形式で「含まない」解釈となることを示唆している。「C「それなら、元日まで休みません」という店の張り紙の場合はどうなるのだろう。」 B「これも、三十一日までは休まないが、元日からは休むということだろう。」。これに対し、東郷 (1985: 26) では「8月6日 (月) まで休みません」という実例 (大丸梅田店広告) に対し、「8月6日」が「休みません」の範囲内 (営業日) である」と「含む」解釈となるとし、「類例も含めて、いずれも各店の営業日であることを確認した」という注を付けている。先にも述べたようにこのような解釈の違いには、「元日」が休日であるのが一般的であるという社会通念が多分に影響していると思われる。

[注6] ………ただし、「事態の継続へ傾いた解釈」であるからといって、必ず「含む」解釈になるというわけではなく、注5にも述べたように、「社会通念に基づく語用論的な要因」により「含まない」解釈となることもある。この点は匿名査読者から指摘いただいた。感謝申し上げたい。

[注7] ………「～になる」の挿入については、木村 (1984: 48) で既に示されている。木村の分析は特に裏付けのないものであったため、東郷 (1985: 27) において「本質的な問題ではない」と否定されているが、実際には否定文における「まで」の「含まない」解釈の要因を言い当てていたと言える。

[注8] ………節を受ける「まで」については、格助詞の「まで」と別に考えられることが多く、その連続性について述べられている事は少ない。奥津 (1966: 6) は「更に「マデ」は文のあとにつくことができる点で、格助詞とは非常に違っている」と述べており、順序助詞が名詞だけを受けるものではないことを指摘しているのは卓見である。また、益岡・田窪 (1992: 190) では、節を受ける「ま

で」について「主節の事態の終了時点を指定する「まで」という記述があるが、終了時点を「含む」のか「含まない」のかについて言及はない。

[注9] ………この雑談は、山内 (2005) の日本語QUIZに関わるものであった。山内 (2005) では「今週は日曜日まで休めません」を取りあげ、格助詞の「まで」ととりたて助詞の「まで」での二義文であることを説明しているが、日曜日を休みに「含む」解釈か、「含まない」解釈かも生じる。また、山内 (2005) では、「この列車は大阪まで止まりません」という例も挙げ、本稿で取りあげたマデ否定の二義についても読者に問いかけている。

参考文献

- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘 (2000) 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 奥津敬一郎 (1966) 「マデ」「マデニ」「カラ」—順序助詞を中心として『日本語教育』9, pp. 2-23. 日本語教育学会
- 木村恭造 (1983) 「マデ」の範囲は、どこまでか『解釈』29(9), p. 5. 解釈学会
- 木村恭造 (1984) 「助詞「まで」の示す範囲について」『京都教育大学国文学会誌』19, pp. 46-49. 京都教育大学国文学会
- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」『言語研究』15. 日本言語学会 (金田一春彦 (編) (1976) 『日本語動詞のアスペクト』pp. 7-26. むぎ書房所収)
- 筑波ランゲージグループ (1992) 『SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE VOLUME TWO: NOTES』凡人社
- 寺村秀夫 (1983) 「時間限定の意味と文法的機能」渡辺実 (編) 『副用語の研究』pp. 233-266. 明治書院
- 東郷吉男 (1985) 「「〇〇駅まで停まりません」—否定表現と対応する「まで」の示す範囲について」『解釈』31(3), pp. 26-28. 解釈学会
- 永野賢 (1964) 「「まで」と「までに」」『口語文法講座3 ゆれている文法』pp. 264-273. 明治書院
- 文化外国語専門学校 (2000) 『新文化初級日本語 I』凡人社
- 堀川智也 (1991) 「「マデ」と否定のスコープ」『言語文化紀要』20, pp. 289-303. 北海道大学言語文化部
- 益岡隆志・田窪行則 (1987) 『日本語文法セルフ・マスターシリーズ3 格助詞』くろしお出版
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法—改訂版』くろしお出版
- 山内博之 (2005) 「日本語QUIZ 今週は日曜日まで休めません」『月刊日本語』18(8), p. 32. アルク (山内博之 (2008) 『誰よりもキミが好き! 日本語力を磨く二義文クイズ』p. 48. アルク所収)